

■ 2003年カンボジア総選挙監視活動

2003年カンボジア選挙監視活動に参加して

古川亜希（中央大学法学部政治学科）

高校生のときに、映画『キリングフィールド』見て以来、私のカンボジア
に対するイメージは映画の中のカンボジアだった。つまり、ポルポト時
代のカンボジアである。今年4月に初めてプノンペンを訪れた時に、
人々の明るい笑顔や、たくましく生活している姿に出会い、私のこれ
までのカンボジアに対するイメージは少し変わった。しかし、国際選挙
監視を必要とする国であるということは、選挙における汚職や賄賂の
蔓延、国民の選挙に対する意識・知識の低さの問題を抱える国で
あることを連想させる。カンボジアでの総選挙に参加することで、生の
カンボジアの政治状況・選挙プロセスをこの目で確かめよう、というの
が今回の活動参加の目的であった。

また、監視活動の意義・活動内容を頭の中で理解はしていても、選
挙監視員として自分がどのような役割を果たせるのか、実際どのよう

な活動をするのかという明確なイメージが沸かなかった。したがって、今回の選挙監視活動に参加することによってあやふやなイメージをはっきりさせることもまた目的の一つであった。

印象的だった村人へのインタビュー

私が短期選挙監視員として派遣されることになったのはコンポンスプー州という、首都のプノンペンから約40km、車で1時間強の場所に位置する州である。現地での短期選挙監視活動は大きく3つの期間に分けられる。投票日までの選挙キャンペーン期間、投票日、そして開票日である。活動内容は主に、①キャンペーン期間中：選挙に関する聞き込み調査を行い、②投票日：いくつかの投票所を巡回し、投票が選挙法どおりに進行しているかを監視し、③開票日：1ヶ所の開票所の開票開始から終了までのプロセスを監視するという行程であった。

選挙監視活動の中で特に印象的だったのは、キャンペーン中の聞き込み調査である。様々な立場の人々へのインタビューを試みた。現地選挙監視NGOのCOMFREL、州選挙管理委員会（PEC）、コムン選挙管理委員会（CEC）そして、インターバンドのカンボジア

現地スタッフや、一般の村人からも選挙に関しての状況・見解を聴取することができた。中でも、村人へのインタビューは得るものが大きかった。というのも、コンポンスプー州ではインターバンドの除隊兵士支援プロジェクトが展開されており、私が監視活動を行った地域には支援対象家族が多く居住していた。したがって、これまでにインターバンドの支援を受けてきた家庭とは、信頼関係を築いてきているので、事情聴取がしやすく、有権者の生の声を聞くことができたのである。

村人へのインタビューの中で、彼らの選挙に対する意識の高さには驚いた。前述したように、私はカンボジア人の選挙への意識は非常に低いのだと考えており、村人は政党からの賄賂に簡単に流されてしまうのではないかとさえ考えていたからである。しかし、我々がインタビューをした村人たちは『選挙に行くのが楽しみ』『新しい政府が誕生することが嬉しい』『賄賂をもらったからといって、その政党に投票するとは限らないよ』などとコメントし、選挙によって新しい政府が生まれること、自分たちは新しい政府を選ぶ権利を持っているということを自覚し、それぞれの意思を持っていた。有権者である事に対して、誇りを持っているかのようにさえ感じられた。彼らの選挙への関心・意識は日本人以上に高いのではないかと、思ってしまった。

このように、PEC,CEC だけではなく、村人の考えを直接聞くことができたというのは非常に有意義であった。有権者の大多数を占める一般国民の生の声をこの耳で聞いて、その姿をこの目で確かめられたことは、カンボジアという国を把握するために非常に役立つ。観光客やお役所訪問を目的とした団体には得られないだろう。政治という舞台には様々な立場の人々の利害が絡み合っており、立場によって主張も様々である。みんな自分たちに不都合なことは言わないから、一つの視点からだけでは中立的に全体を見ることはできない。一つの物事（今回の場合は選挙）の全体を見るためには、多角的な視点が不可欠だと痛感した。

全体的に順調だった選挙、低投票率という結果

さて、投票・開票のプロセスに関しては、多くの団体から全体的に順調に行われたという評価をされている。コンポンスプーにおいても、問題はまだまだ存在したが、特筆すべき深刻な不正問題は見受けられなかった。インタビューを行ったカンボジア人の多くが『これまでと比べてよくなった』とコメントしている（公務員、一般国民ともに）。しかし、COMFREL など多くの国内外の団体が指摘しているように、8

1%という今回の選挙における投票率の低さは気にかかるところだ。

コンポンスプーにおいては、61%という低さである。監視活動中に

COMFREL から得た情報によると、いくつか原因が考えられ、

●有権者登録をする場所と投票する場所と

が違っていたこと。つまり、有権者登録をした場

所が投票所だと思って、当日出掛けたら、実

は自分の投票場所は違う場所であった、

●前日までに降り続いていた雨により、洪水が

起こっている、道がぬかるんでいるなどが原因で

物理的に出掛けることができなかった、

そして、

●字の読めない人がリストの中から自分の名

前を見つけ出せず、投票所の係りがそれを手

伝わなかった、などが挙げられた。

まず、有権者登録の場所と投票場所が違っていたというケースだが、

有権者の大多数である村人のほとんどは車などを所有しておらず、

当日はオートバイか徒歩で投票所へ向かう人がほとんどだ。気温3

5度近くの中、周りに日陰のない道を歩いて家から投票所まで向かうのだ。せっかく辿りついたと思ったら、違う場所へ行かなければならぬとなると、投票に対する意欲は失われてしまうことは想像できる。

中には、間違えた投票所に遅く来たために、正しい投票所への移動する時間がなく、投票をあきらめざるをえなかった人々もいる。次に、洪水による影響であるが、私自身も監視活動の移動中に洪水の影響を受けたので、洪水後の道を利用することがいかに困難であるかわかる。カンボジアの地方の道路は、環状線を少しずれると土の道になる。つまり、洪水が起こるとこの道は泥と化し、歩行は非常に困難である。オートバイの車輪が泥にはまってしまうこともよくあることである。

最後に、自分の名前をリストから見つけ出せなかったケースであるが、その原因として、障害者であるため目が見えない、教育を受けていないため字が読めず名前が探せないことがあげられた。また、先日カンボジア市民フォーラムの選挙報告会に参加したのだが、この問題に関して違った見解を得られた。それは、一部の政党が支援者の有権者カードを回収し、投票者リストの中からすぐに名前を見つげられるよう、投票者記号が書かれている紙を配布した、というものであった。

(この見解は、カンボジア市民フォーラムの報告会に参加するまでは全く知らなかった)

これらの投票率の低さの原因などを検証するにあたって、自分の体験は理解を深めるで重要な手助けとなった。実際に自分がその場を体験していなければ、このように深く理解することはできなかったと思う。まさに百聞は一見にしかず、である。また、今回の低投票率という結果からは、インフラ整備の問題をはじめ、選挙不正の巧妙化の疑惑まで、様々なカンボジアの問題を見ることができた。

監視活動を通して思うこと

今回の監視活動を通して、すでにカンボジアでの“民主化”は始まっていると感じた。繰り返しになるが、私は今回の活動に参加するまでカンボジア選挙に対して、不正が蔓延しているイメージを抱いていた。しかし、インタビューなどの活動を通してそれは私の偏見であったと思わざるをえなくなった。確かに、不正は存在する。汚職は依然として大きな問題である。我々の監視した地域以外では選挙に関連すると思われる殺人事件も起こったという。しかし、『前の選挙に比べたらよくなった、自由になった』という一般国民の意見は無視できない。1

1993、1998年の選挙時に比べて、国民の選挙の意義に対する理解が深まっているということも見逃してはならない。

私がこれまでに持っていたイメージは、先進国と途上国、つまり日本とカンボジアを比べて抱いていたイメージである。事務処理能力が低い、不正行為が目立つという評価は、『日本と比べて』得られた評価である。えてして、国同士を比較することで、その国の発展段階を計る方法が広く適用されている。もちろん、他の国と比較することは発展目標を定めたり、国際社会における位置を確認するのに必要である。しかし、一つの国の発展を考えるためには、先進国と発展途上国を比較するものさしよりも、その国の中での比較がより重要なのではないかと思う。今回のカンボジア選挙に話を戻すと、現在のカンボジアが日本・欧米と比べて何が劣っているのかを導き出すよりも、1993年、1998年の選挙に比べて、国民の意識がどのように変わったかを評価することがより必要であると考えます。

最後に、選挙監視を国際協力の一環ととらえた感想を少し述べたい。選挙監視員は、カンボジア人が行う選挙プロセスについて、質問をすることはできても、指図することはできないのである。仮に、明らか

に目の前で不正が行われていたとしても、それを『注意』することは規則により禁じられている。訂正を促す質問をしたとしても、相手に『これでいいのだ』と言われてしまえば、それ以上になすすべはない。この選挙監視委員の性格から、国際協力のあるべき姿が少し見えた気がする。選挙監視に限らず、広く国際開発・国際協力という立場から考えてみても、対象国に押し付ける形はいいやり方とはいえない。

自分の国ではないのだから、自分のやり方を強要してはいけないのではないか。先進国がすべて正解というわけではない。その国にはその国のやり方があるのだということを、私たちは常に自覚しておかなければならない。

カンボジアが国際社会に存在する一国である限り、国の信頼を取り戻すことは不可欠だと考えられる。一方で、汚職があまりにひどいため海外からの投資が進まないなどの問題があるのも事実である。こういった問題も踏まえて、国際社会の中でいかに自分の足で歩いていくかが、今後のカンボジアに必要なことではないだろうか。

Copyright ©2002-2003 InterBand All rights reserved.